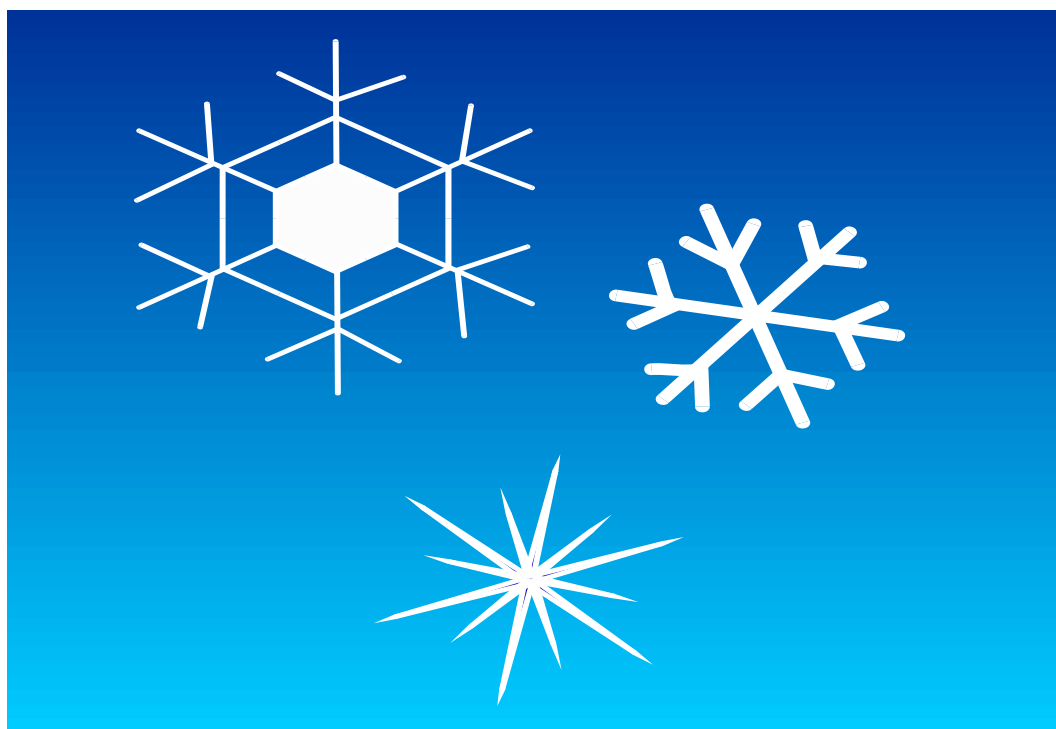


—北海道立図書館北方資料室所蔵資料展—

映画化された  
北海道の文学



会期：平成18年1月6日～2月26日

場所：北方資料室展示ホール

## <開催にあたって>

北海道は昔から映画に縁の深い土地です。記録によれば、明治初期の札幌を舞台にした森田たま原作の映画（山本薩夫監督 昭和 14 年作品「リボンを結ぶ夫人」）が製作されています。

最近では、明治初期に静内へ四国・淡路から移住した稲田家の人々の物語、「北の零年」（2004 年）が北海道を舞台にしたスケール豊かな作品として話題を集めたのも記憶に新しいところです。

今回の展示では、北海道を舞台にした映画（昭和 20 年代～現在）で当館が所蔵するその原作を紹介いたします。

---

## <目次>

- ・ 北海道を舞台にした映画史年表 …………… 巻頭
- ・ 映画作品解説 …………… p 1～8
- ・ 参考文献 …………… p 9
- ・ 映画の舞台 北海道（マップ）…………… 巻末

## <映画作品解説>

※ 以下、前頁の「映画史年表」にあるリスト No. と作品名

### 1・11 【ジャコ万と鉄】

新潟出身で札幌に移住した作家、梶野憲三(1901～1984)の小説『鯺漁場』の映画化。ニシン漁場での二人の男の対決を男性的なタッチで描いたアクション作品。原作の舞台は天塩だが、シナリオでは積丹半島、撮影は日本海に面した増毛の岩老(いわおい)海岸が中心だった。深作欣二監督によるリメイク版でのロケ地は積丹半島の島武意海岸であった。

### 2・10 【<sup>ばくろ</sup>馬喰一代】

留辺蘂出身の作家、中山正男(1911～1969)が父親をモデルに書いた自伝的な小説(大正時代の北見を舞台に息子を一人前に育て上げる馬喰の父親を描く)を映画化したもの。1951年製作の方は作品が好評で、2年後には続編(大映製作、島耕二監督、市川猿之助、菅原謙二出演、ロケ地は北見・留辺蘂)が製作された。

### 3 【蟹工船】

原作は小林多喜二(1903～1933)の名を国際的に有名にした代表作で、国内では1929年発表と同時に発禁となった。俳優山村聡の監督デビュー作としても有名。出港する場面は原作どおり函館でロケされた。映画は、迫りに満ちた集団演技で壮烈な社会劇を創造した。

### 4 【乳房よ永遠なれ】

帯広に生まれ、奔放な生への情熱と厳しい自己凝視をうたった歌集を残して31歳で逝った中城ふみ子(1922～1954)をモデルにした映画。主舞台は彼女の離婚後と乳ガンで入院した札幌で、病床の彼女を訪れて恋人になる東京の新聞記者、若月彰の手記が原作となっている。戦後の女性監督第1号として名高い田中絹代の第3作である。

## 5 【大地の侍】

当別生まれの作家、本庄陸男（1905～1939）の代表作『石狩川』の映画化。彼は佐賀県から当別町に入植した家庭に生まれ、8歳まで同町に住んでいたが、後に東京・青山師範学校を経て教員生活に入る傍ら小説を書き始め、1939年に『石狩川』を刊行したが、これは叙事詩的大河小説3部作の第1部として構想されたものである。しかし、刊行後2か月後には夭折してしまったので、結果としてこの3部作は未完成となった。

開拓史の資料を集めて書き上げたこの大作は、史実をほぼ忠実に記録した歴史小説であり、その内容は明治維新後、石狩当別に移住した奥州・岩手山藩の人々の苦闘を描く開拓の物語である。派手な活劇のない本作は、当時の東映としては異色時代劇とも言える。

この作品は、フィルムが製作会社の東映にも、東京の国立近代美術館フィルムセンターにもなく、原作の舞台である当別町と宮城県岩出山町の役場で保管されている2本だけという大変貴重なものである。

## 6・20 【挽歌】

霧の街釧路が舞台で、1957年の歌舞伎座製作の方は、同人雑誌『北海文学』に原田康子（1928～ ）が連載中だった原作を五所平之助監督が目にとめ映画化したもので、配役は怜子（久我美子）、桂木（森雅之）であった。1976年の東京映画製作の方は、それぞれ秋吉久美子、仲代達矢であった。

後者は、当初藤田敏八監督が撮るはずだったが、映画の場所や状況を“霧の釧路”から外せないと主張したスタッフと意見が合わず途中で降板したというエピソードがある。

## 7 【森と湖のまつり】

北大助教授時代（1947～1948）にも、知里真志保、更科源蔵、河野広道、渡邊茂、高倉新一郎など「アイヌ研究の五傑」といわれる人たちからアイヌの実情を深く学ぶ機会に恵まれた武田泰淳（1912～1978）が、雑誌「世界」（岩波書店刊、1955年8月号～1958年5月号）に連載し、単行本としても新潮社から刊行された原作を映画化したもの。

東京から来た女流画家（香川京子）とアイヌ青年（高倉健）のロマンスを軸に、アイヌと和人との結びつきや相克、離反などのテーマをダイナミックに描いた。釧路管内の塘路（とうろ）湖を中心に2か月のロケが行われたが、

塘路湖のノタツ岬でのペカンペ祭りなど、アイヌの伝統的な祭りや風俗が収録されているのが興味深い。

## 8 【コタンの口笛】

原作者の石森延男(1897～1987)は、札幌生まれで札幌師範に学び、本作で1957年に小川未明文学賞を受賞した。千歳郊外のコタンを舞台に差別の中で生きるアイヌの子どもたちを描いた作品で、千歳川畔に建てたコタンのロケセットが中心となった。

## 9 【サムライの子】

当時、“サムライ部落”と呼ばれていた小樽の市営住宅を舞台にした本作は、小樽出身の児童文学者、山中恒(1931～ )による原作の映画化である。内容は貧乏にめげぬ子どもたちを描くもので、出演者には札幌や小樽のアマチュア劇団が加わり、美術は札幌の“ほりぞんとぐるーぷ”で現地主義の成果を見せた。撮影スタッフは夏休み中の小樽花園小学校の雨天体操場にセットを組み、近くの旅館から通って雨の日も夜も撮影を続けたという。

## 12 【飢餓海峡】

原作は水上勉(1919～2004)で、北海道の人には忘れることのできない洞爺丸遭難と岩内大火を発端に展開する巨匠・内田吐夢監督晩年の代表作。岩内町朝日温泉、上磯町七重浜、函館などが舞台となっている。

1954年に全道を襲った台風15号による洞爺丸遭難と岩内町で発生した大火がモデルで、原作・映画ともこの2つの惨事を7年遡らせ、日本がまだ敗戦後の混乱の中から抜け切らないでいる1947年に移し、質屋放火強盗殺人事件をからませた推理大作を展開している。

## 13 【網走番外地】

本作品は、伊藤一が網走刑務所在監中の1年余の間に書き綴った日記を元に出版された原作に基づく。元々は1959年に小高雄二、浅丘ルリ子主演の純愛映画として制作されたが、石井輝男監督が1965年にタイトルだけもらい高倉健による脱獄や逃亡で見せ場満載に作られたこの作品の方が当り、18作までシリーズ化され同時に網走という地名が一躍有名になったものである。

## 14 【氷点】

言わずと知れた旭川在住の三浦綾子（1922～1999）が朝日新聞の一千万円懸賞小説に応募し、当選した原作を映画化したもの。1964年の暮れから連載されて大評判になったが、終了と同時にテレビドラマ化、それが終わり近くなると、今度は映画が封切られるというブームを引き起こしたのであった。映画のロケは旭川市内及びその近郊で、当時はまだあまり知られていなかった外国樹種見本林はこの作品で一躍有名になった。

## 15 【終わりのなき生命を】

小神須美子原作の自伝的な闘病記録の映画化。舞台は生まれ育った小さな町という設定で岩内から始まり、入院する札幌、療養先の洞爺湖と、1か月にわたるロケでほとんどを撮影した。実名で登場するヒロインの、運命に直面する厳しさと生を求めるひた向きさを盛り上げ、成功した一作となった。

## 16 【大地の冬のなかまたち】

学校向けに製作されたこの児童映画は、美唄生まれの児童文学作家、後藤竜二（1943～ ）の原作に基づく。炭鉱を背景とした町での私的な体験を盛り込みながら、冬の大地を背景に富良野の開拓農家の中で生きる子どもたちを逞しく描いた。配役はすべて当時の富良野小学校の生徒たちであった。

## 17 【塩狩峠】

1909年に塩狩峠で起こった実話に基づく三浦綾子の小説が原作。犠牲の精神と人間愛に溢れた感動的な作品。製作費を提供したのがアメリカのビリー・グラハム伝道教会で、撮影は塩狩、旭川などで行われた。和寒駅が昔の札幌駅に扮し、客車は新たに大船の撮影所で作って大夕張鉄道を走らせるなど時代色の表現に苦労したという。

## 18 【流れの譜】（第1部 動乱、第2部 夜明け）

戦前から戦中、戦後にかけての軍人一家三代の歴史を激動の昭和史を背景に描くスケールの大きな大河映画。原作は当時北海道新聞の記者であった菅忠淳（祖父は九州・黒田藩の藩士だったが、明治維新で家禄を失い、屯田兵

となった)。「週刊朝日」が募集した“わが家の三代”入選作で、札幌が舞台だが、映画では古い建物が残っている旭川に変えられている。制作費3億5千万円の大作だが、クランクインから封切りまでわずか66日であった。残念なことに作者の作品は佳作だったため、「週刊朝日」には掲載されず、写しも残っていないとのこと。

## 19 【阿寒に果つ】

ヒロインのモデルは、天才少女画家と言われた札幌南高の加清純子(1933～1952)、恋と絵に生き詰まって阿寒で自殺したと伝えられる。同級生だった渡辺淳一(1933～)、彼女を題材に書いた小説をもとに映画化した作品。主舞台は札幌だが、都市化された札幌でのロケに当っては作品(人口が30万人前後の昭和20年代の札幌)のイメージを作るのに苦心したと言われる。

※ 加清純子の遺作画集「わがいのち『阿寒に果つ』とも」(日野原冬子編 青娥書房 1995 請求記号723.1-Ka)も出版されている。

## 21 【駅 STATION】

富良野に住み着き、テレビドラマ「北の国から」などで有名になった倉本聡(1935～)による作品の映画化。射撃の名手である刑事と3人の女の別れが、それぞれの駅(銭函、増毛)を背景に描かれている。

## 22 【伽耶子のために】

在日朝鮮人二世の青年と在日朝鮮人の男と日本人の女の夫婦の養子として育った日本人の少女の恋と別れを描いた痛切で情感豊かな映画である。原作者の李恢成(リカイセイ、1935～)は、樺太の真岡で生まれた朝鮮人で、戦後札幌に定住した。小栗監督は、森と中標津の二つの町を主舞台とし、重い民族問題を背負う青春の苦悩を清冽に表現した。

## 23 【もうひとつの少年期】

現在大野町教育委員で、元北海道家庭学校寮長の藤田俊二（大野町出身、1932～ ）の原作、旭川出身の石山監督によるこの映画は、地味ながら不幸にめげない少年たちへの励ましと共感に溢れた佳作であった。北海道家庭学校とは、東京の巣鴨に家庭学校を創設した留岡幸助が1914年に国有地の払い下げを受け、少年感化事業を目的に遠軽町に開設したものである。映画では少年たちが夫婦の職員と共に、畑作、土木、造林、酪農などを通して自立心を養う姿が描かれている。

## 24 【雪の断章 一情熱一】

札幌を舞台とする佐々木丸美の小説の映画化。身寄りのない少女が二人の男性の間で成長し、殺人事件に巻き込まれ、それを乗り越えて成長していくという内容。デビュー間もない映画初主演の斉藤由貴を凝りに凝った雪の町のセットに置き、その清新な魅力を捉えようとした相米慎二監督の野心作。

## 25 【時計 Adieu L'Hiver】

先の倉本聡が初めて監督を行った作品で、「北の国から」にも出演した中嶋朋子にフィギュア・スケートを教え込み、5年間の成長をリアルタイムで追うというストーリー。釧路のパシフィック・ホテルなどが登場する。

## 26 【恋人たちの時刻】

札幌在住で精神科医としても活躍した芥川賞候補作家、寺久保友哉（1938～1999）の小説の映画化。恋人に頼まれて、ある女性の過去をたぐりながら札幌と小樽を行き来する青年の話である。彼が予備校の生徒という設定で、代々木ゼミナール札幌校の他、小樽水族館などがロケに使われた。

## 27 【光る女】

原作は滝上出身の小檜山博(1937～ )で、この小説で北海道新聞文学賞と泉鏡花賞を同時に受賞している。主人公は滝上から許嫁を探しに行くが、もちろん道内ロケは滝上である。



## 28 【はるか、ノスタルジィ】

青春時代を過ごした小樽を訪れた作家と彼に町を案内する少女が、作家の本名を名乗る不思議な少年に導かれて、痛ましい青春の記憶を再生させていくドラマで、「転校生」「さびしんぼう」に続く原作・山中恒、監督・大林宣彦のコンビの第3作で、山中が故郷・小樽を舞台に書き下ろした作品を大林自身が脚色、大林ファンタジーの集大成的な作品になっている。

## 29 【ひかりごけ】

1943年の冬の北海道で実際に起こった難破船長人食い事件をもとに、極限状態に追い込まれた人間の狂気を描いた武田泰淳原作の同名小説（1954年に「新潮」に連載開始）を、「海と毒薬」等で有名な熊井啓監督が見事に映画化した作品。ロケ地には根室羅臼町が選ばれた。ベルリン映画祭にも出品されて話題となったもの。

※ ルポルタージュ『裂けた岬「ひかりごけ」事件の真相』（合田一道著 恒友出版 1994 請求記号 916-G）も興味深い。

## 30 【おろしゃ国酔夢譚】

鎖国時代にシベリア大陸を横断した大黒屋光太夫（1751～1828）の史実を壮大に描く。旭川生まれの井上靖（1907～1991）の小説を原作とし、崩壊直前のソ連と日本の合作により完成した作品。そのロケ地のひとつに選ばれたのが奥尻島であった。奥尻島での撮影は、最初の場面、伊勢白子浦の商人の持ち船・神昌丸が暴風雨の中で難破するシーンと、漂着先のアムチトカ島、カムチャツカで光太夫一行がロシア人との暮らしのシーンなど。

## 31 【LOVE LETTER】

死んだ恋人の青年に宛てた届くはずのない一通のラブレターが、同姓同名の女性に届いてしまったことから、埋もれていたもうひとつの恋が浮き彫りにされていく。

日本映画監督協会新人賞を受賞後、小樽を舞台にして岩井俊二監督が初めて撮った劇場長編映画。映画では、生きている藤井樹が働いている図書館に

は現在の小樽市博物館（旧日本郵船小樽支店）が、彼女が肺炎で担ぎ込まれる病院には小樽市役所が使われている。

### 32 【鉄道員(ぽっぽや)】

第27回直木賞受賞作品である浅田次郎（1951～ ）の『鉄道員』が原作のヒューマン・ドラマ。映画での駅名は幌舞駅となっているが、実在する駅名は幾寅駅であり、この駅周辺でロケが行われた。ロケで使用された民家の古い建物などは現存しており、また、展示館などもある。

### 33 【風花（かざはな）】

“風花”とは、冬から春へと向かう晴れた日に、まだ雪の残る山肌を撫でて風に吹かれ舞い散る櫻の花びらのような細雪のこと。帯広在住の江戸川乱歩賞受賞作家、鳴海章（1958～ ）原作の北海道を舞台にしたロードムービー。

### 34 【海猫】

札幌出身の作家、谷村志穂（1962～ ）による島清恋愛文学賞の受賞作。自らのルーツである北海道への思いを込めた恋愛小説の映画化。監督は、「失樂園」で男女の究極の愛をストレートに描き出した森田芳光。

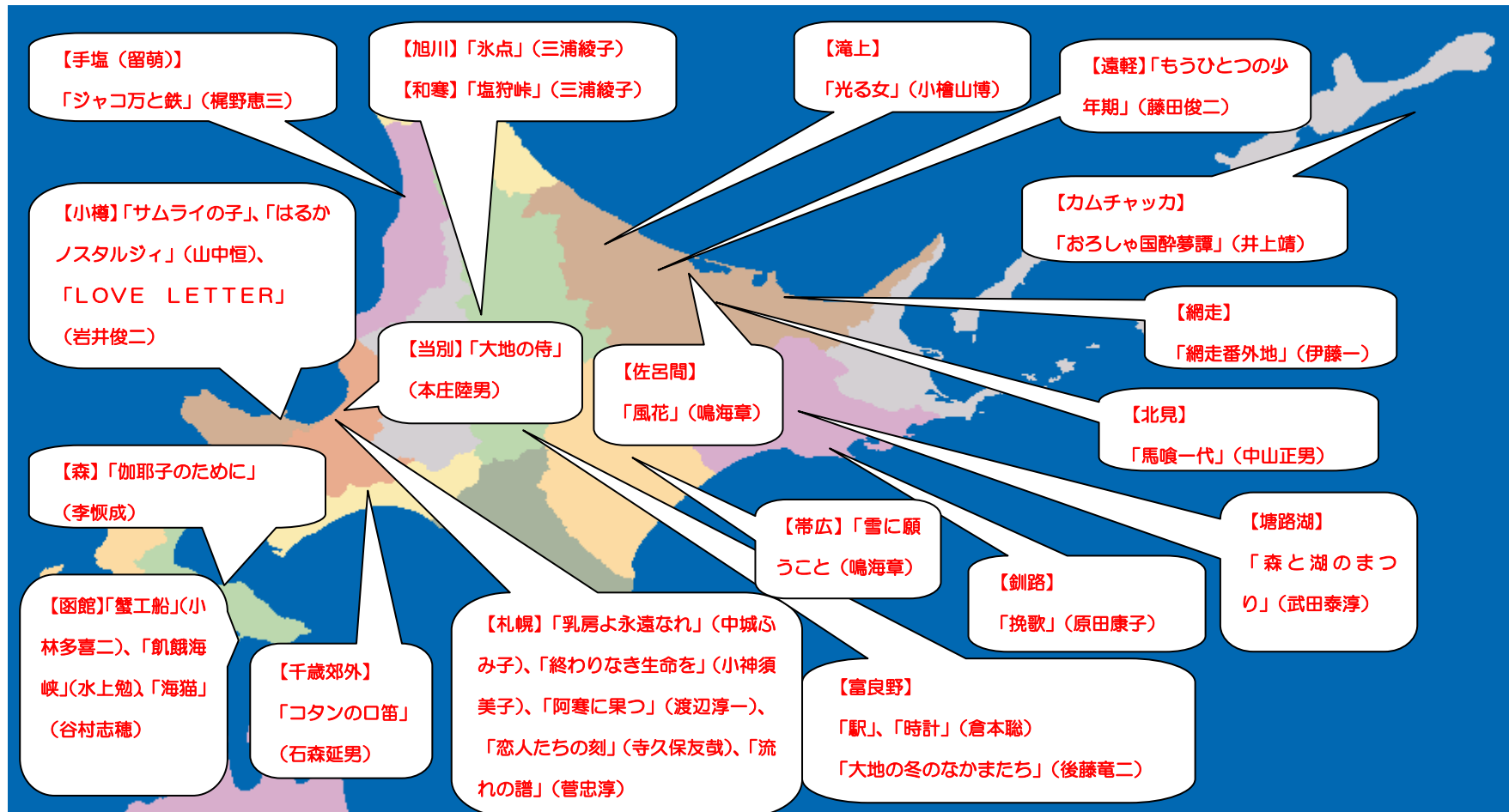
### 35 【雪に願うこと】

帯広のばんばを舞台に佐藤浩市、伊勢谷友介、小泉今日子が主演したこの作品は帯広で撮影され、今年の東京国際映画祭で東京サクラグランプリを取った。原作は鳴海章の『<sup>ばんば</sup>輓馬』で、近日公開が予定されている。

<参考文献>

- ・『映画の中の北海道』(竹岡和田男著 北海道新聞社 1991 請求記号 778.2-Ta)
- ・『映画 北の舞台』(朝日新聞社編 新北海道教育新報社 1980 請求記号 778-A)
- ・『北海道映画史』(更科源蔵著 クシマ 1972 請求記号 778.2-Sa)
- ・『文学散歩 名作の中の北海道』(木原直彦著 北海道新聞社 1988 請求記号 910.26-Ki)
- ・『日本映画を歩く ロケ地を訪ねて』(川本三郎著 JTB 1998 請求記号 778.21-Ni)
- ・『日本映画作品辞典 戦前編(1~3)、戦後編(1~3)』(日本映画史研究会編 科学書院 1996~1998 請求記号 778.03-Ni)
- ・『月刊アイワード ~映画の中の北海道・特集~』(アイワード、2003年7月~2005年3月号)

# 映画の舞台 北海道 (マップ)



—北海道立図書館北方資料室所蔵資料展—

## 映画化された北海道の文学

発行日 平成 18 年 1 月 6 日

編 集 北海道立図書館北方資料部

発 行 北海道立図書館

〒069-0834 江別市文京台東町 41 番地

TEL011-386-8521

FAX 011-386-6906